

尾道商業会議所記念館(第22回企画展示解説)

(2013年11月1日～2014年1月8日)

テーマ 尾道祭礼歳時記～祭を支えた尾道商人～

神社仏閣が数多く点在する尾道は、それだけに祭礼もその数多い。

春のみなと祭、夏の山王祭、祇園祭(三体みこし)、天神祭、水祭り、住吉祭(花火)、秋は氏神様の大祭に、晩秋の町を沸き立てる一宮さんのベッチャー等々…

旧尾道町内だけをとって見ても、夏季を中心に大きな祭礼が立て続けに見られるなど、猫の額のようなと比喻されるこの小さな港町に、これだけ多くの祭が見られるのも、他所には無い珍しさ、特異性があるように思える。

それは単に信仰、宗教行事というだけではない、それ以上に実質の担い手、支えるべき立場にある尾道町人の篤い心意気でもあり、尾道の町を維持する活気の象徴としての祭礼文化が、ここに大きく映し出されて来る。

そうした町を彩り、活気づける祭礼文化を、主に維持・財政面で支えて来たのが尾道商人達であった。

幅広い分野に亘って尾道文化を花開かせ、表に裏に支え、担って来た尾道商人達にスポットを当てた前回展示【尾道文化の興隆と商人たち】の、続編ともなり得る今回の展示では、「祭礼と商人」を切り口に、盛んなりし尾道町の祭りと、それを支えた尾道商人達にスポットを当ててみたい。

展示の内、とりわけ尾道ベッチャー祭を、地元の商人が奮起し創出させたと伝える松木家秘蔵「一宮祭典の由来」は、写本(原本から書き写し)ながら、今回初めて掘り起され、公開に供される貴重な資料である。

旧尾道町内祭礼歳時記

凡例

- * 旧尾道町内(久保・十四日・土堂)の年中に見られる(見られた)祭礼行事の一覧。
- * 執行日は旧暦での旧例祭日とし、現在も執行の祭礼のみ新暦での現行祭日を併記する。
- * 祭礼は主だったもの、とりわけ記録のはっきりしているもののみをピックアップしている。

祭日(旧)	祭礼名称	執行神社	備考
2月25日	梅花祭	御袖天満宮	廃絶
4月初旬	勇徳稲荷卯の祭	勇徳稲荷神社	5月中旬の土曜日に執行
4月初旬	山王祭	山脇神社	5月第3土曜日に執行
4月20～27日	丹花荒神社祭	荒神社	旧暦3月27日に執行
5月5日	端午祭	久保亀山八幡宮	廃絶
5月14日	秋葉祭	天寧寺境内・秋葉権現社	社祠自体が廃絶
6月7～14日	祇園祭(三体神輿廻し)	祇園社(八坂神社)	6月最終土曜日に本祭、その前週土曜に前夜祭執行
6月17日	築嶋厳島祭	厳島神社(新開)	廃絶
6月23～25日	天神祭	御袖天満宮	7月海の日に向けての3日間
6月23日	和霊祭	久保亀山八幡宮境内・和霊神社	廃絶。蚊帳待ちの風習を伝えていた
6月24日	熊野祭(俗称・水祭り)	水尾町・熊野神社	7月下旬の土曜日に執行
6月28日	住吉祭(花火祭り)	住吉神社	7月最終又は8月初の土曜
8月15日	亀山八幡祭	久保亀山八幡宮	10月15日前後の土・日

祭日(旧)	祭礼名称	執行神社	備考
8月24日	鳥須井八幡祭	栗原鳥須井八幡宮	10月第3土・日に執行
9月28日～30日	良祭(秋季大祭)	良神社	後に10月7～9日となり、現在はそれに近い3日間
10月10日	荒神宮胡神社例祭	荒神宮胡神社	長江胡小路の名の起りとなった社祠。長江3丁目へ移設
10月17日	一宮祭(尾道ベッチャー)	吉備津彦神社	11月1～3日に執行
10月20日	胡神社例祭	町内各所の胡神社	本通り・長江通り界限
11月15日	丹生祭	浄土寺鎮守丹生社	尾崎漁師町の大祭

尾道ベッチャー祭りのプロデューサー ～創始者としての玉光屋・松木家～

尾道を代表する奇祭として名高い、尾道ベッチャー祭りの始まりは、江戸時代の中頃、尾道町に疫病が流行した折、時の町奉行に神のお告げがあり、異形なる鬼神(ソバ・ベタ・ショーキの三面の鬼神と獅子頭がこれに相当)がその使者として登場。その霊力によってたちどころに疫病が退散したとするのが、語り伝えられて来た祭の起源であり、これを執り行う一宮さんこと吉備津彦神社(東土堂町、宝土寺境内鎮座)の縁起(お宮の起りを語る伝承)としてよく知られる。

伝説世界を現実の歴史事象としてアプローチした郷土史上の先学研究では、ベッチャーの祭礼風景が、江戸時代の文献史料上に皆無である点に着目し、明治以降に始まったものではないかとの考察がなされている(森信蔵「ベッチャー祭り考」…『尾道市文化財春秋 第16号』所載・昭和56年3月、尾道文化財協会)。

この森氏による丹念なる調査成果の中で、とりわけ目をひくものが、皆無という中で唯一の文献史料になる【松木家文書】の存在である。

松木家は、十四日町(現在の十四日町～長江地区)に住し、屋号を「玉光屋」と称す商家であった。その松木家の祖先・松木伝兵衛氏(松木家の過去帳では1837(天保8)年、72歳で歿)がベッチャーを創出させ、崇敬していた一宮社へ寄進奉納したことを語り伝えているのが、松木家に伝わった古い記録文書の一つ【土堂町一宮祭典ノ由来】なるもの。

玉光屋・松木家自体が既にその地に無く、古文書もそれと共に行方知らずになっているが、幸いなことにその写本が遺されており、森氏が調査で目にされたのも原本ではなく、こちらの写本であった。

写本は1929(昭和4)年5月、市立図書館の館長事務取扱の職にあった吉本佐吉氏(尾道北高校の初代校長でもある)が、郷土史研究に資する為、断片的になっている文書史料を採集し、『雑録輯』(数巻にまたがる)として収録・保存したものであるが(巻頭の前書きにて、吉本氏がその事を書記)、その写本の記録集自体が森氏の調査を除いて日の目を見ることなく、所在もはっきりしないままに時を経ていた。

それがこの度、尾道学研究会、市立中央図書館、尾道遺跡発掘調査研究所(市教育委員会)協働による、図書館書庫の再確認調査の中で発見されるに至った。

文書は子孫の手によって記録されたものであり、森氏も指摘の通り、一部に時代的な誤差が見られるなど、古文書としてはやや緩いところがあるにはあるが、ベッチャーの始まりを現実の歴史の中で語る唯一の史料として、またそれが一人の尾道商人の奮起によって始まり、春のみなと祭、夏の住吉花火と並び、町中が大いに賑い立つ祭礼へと発展している事に、相応の取り扱いと、敬服の眼差しを注がずにはいられない。



尾道市立中央図書館所蔵
雑録輯

寄附台帳に見える玄洞翁と伊藤忠

祭礼の執行や神社の営繕等を記録する当時の文書には、必ずといってよいほどに、尾道商人達の名前が並び立ち、それぞれの祭礼、神社の維持に果たした商人達の役割、心意気を今に偲び見ることが出来る。

そうした記録文書の一つに、尾道ではなく、大阪所在の商人達で占められた一冊の寄附台帳が久保町の氏神・亀山八幡宮(西久保町鎮座、通称・久保八幡神社)の所蔵文書の内に見られる。

台帳の表紙部分を欠損している為、寄附対象となる祭礼・神社がはっきりしないが、寄附金額の記載に混じって、【八坂御神燈式張】の項目が幾つか確認されることから、久保新開の厳島神社(通称・明神社)の内に合祀された、八坂神社(明治以前は祇園社・祇園宮)における寄附台帳ではないかと目される。

寄附者は総じて大阪商人が名を連ね、その内の一人に、【一金五拾円 大阪市淡路町五丁目洋反物商 山口清助】との記載がある。山口清助とは、尾道市名誉市民に列し、上水道の敷設に学校建設、寺社への寄進と、尾道市においても類稀なる貢献を成した山口玄洞翁その人である。

玄洞翁は、八坂神社、並びに明治以後より同社を管轄する亀山八幡宮の鎮座する久保町(現・久保2丁目ニシテラ小路)の生まれで、大阪へ単身出て後、丁稚奉公から身を立て、大実業家として大成した人物であり、個人・企業の支援活動では尋常ではないほどの功績を全国各地に遺す。ここにある清助とは、丁稚時代に付された名であり、独立起業後もその名を大切に、創業時の店の名を「山口清助商店」としていた。

玄洞翁と並んで寄附者として名を連ねる【大阪市本町三丁目呉服商 伊藤忠兵衛】とは、かの大手総合商社として知られる「伊藤忠商事」(丸紅含む)の創業者である。

玄洞翁が淡路町に店を構えていた時代から推察して、寄附台帳の作成年代は1892(明治25)年～1896(明治29)年の間と思われる、その当時の玄洞翁の寄附金50円は、現在の貨幣価値に換算しておよそ約100万円程度、それに続く伊藤忠の40円は約80万円程度の金額と、何れも高額寄附。

寄附を寄せた大阪商人の大半が、呉服に洋反物と、玄洞翁と同業・関連する業種であり、その所在地も山口商店の周辺界隈に集中することなどからみて、この寄附台帳は、玄洞翁のコネクションによって集められたものと推察されてくる。



八坂神社大祭典道具再興寄付簿
亀山八幡宮所蔵

商家が花を添えた「笠鉾」飾りと「町頭」

～尾道祇園祭礼之図より～

幕末～明治にかけての尾道祇園祭の情景を、ビジュアルで今に伝えてくれるのが、堀田翠峰画【尾道祇園祭礼之図】、吉

岡春額画【備後尾道祇園祭禮会合絵図】・【備後尾道祇園祭御幸畧図】(何れも久保・亀山八幡宮蔵)。

豪勢で壮麗なる往時の祭礼風景に、一層の彩りと華やかさを添えているのが、海岸端にズラリと並んだ「纏」(まとい)状の飾りもの。

「笠鉾」(かさほこ)と称されたこの飾りは、旧尾道三町の有力商家からそれぞれ出されたもので、祭に寄せる商家の心意気を示すものでもあった。

詳細なる祭礼図を描いた堀田翠峰(久保町出身の教育者で文人)の記録によれば、笠鉾は金欄の幕を張り、二重の笠の上に各商家の家紋を付した金色の纏を掲げたもので、二人交代で担ぎ、三体神輿の巡幸にお伴したとある。

これを出した商家として、次の商家を列記している。

- 角灰屋、西灰屋、東灰屋の各橋本家●笠岡屋・小川家●金光屋●御所住屋・高垣家●曲がり嶋屋●上住屋・島居家●本油屋・亀山家●金屋・栗田家●木綿屋・阿蘇家など。

※時期によって増減あるものと思われる。

笠鉾と並んで町の名を記して立つ飾りものは、「町頭」(まちがしら)と称され、三体神輿を担う、久保町(一つ巴神輿)・十四日町(二つ巴神輿)・土堂町(三つ巴神輿)の旧尾道三町内のいわば旗印的なものとして出された。

こちらはその町を代表する商家によって担われ、久保町は金屋・栗田家が「波に乗る鯨(シャチホコ)」を飾り、十四日町は灰屋・橋本家が「鶴に軍配」を飾り、土堂町は油屋・亀山家が「鳳凰(ほうおう)」を飾り立てた。

これらは全て現存しないが、町を挙げての大祭礼に、商家が大いに彩りを添え、祭礼を盛り立て、ひいては町を活気づけた往時の様相や当時の人々の気概が、この資料から生き生きと今に伝わってくるだろう。

図… 上から十四日町、久保町、土堂町の町頭と笠鉾「尾道祇園祭礼之図」より

